HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ミサ典礼(感謝の祭儀)における「主の祈り」の位置づけと「主の祈り」翻訳の歩み : 日本ローマ・カトリック教会の場合
Author(s)	牧野, 玲子
Citation	基督教学, 34, 21-26
Issue Date	1999-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46608
Type	article
File Information	34_21-26.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

ミサ典礼（感謝の祭儀）における「主の祈り」の位置づけと「主の祈り」翻訳の歩み
――日本ローマ・カトリック教会の場合――

牧野玲子

一．ミサ典礼における「主の祈り」の位置づけ（概略）

第二ヴァティカン公会議以後のミサ典礼（感謝の祭儀）は次の各部からなっている：

（A）開祭の儀（Ⅰ。入祭、Ⅱ。回心の祈り、Ⅲ。あわれみの賛歌、Ⅳ。栄光の賛歌、Ⅴ。集会祈願）

（B）ことばの典礼（Ⅰ。聖書朗読、Ⅱ。朗読の合間の歌、Ⅲ。説教、Ⅳ。信仰宣言、Ⅴ。共同祈願）

（C）感謝の典礼（Ⅰ。供えものの準備、Ⅱ。感謝の祈り・奉献文 (注)－1、Ⅲ。交わりの儀 (注)－2）

（D）閉祭の儀

『ローマ・ミサ典礼書の総則』（1969.11.30）（Institutio Generalis Missalis Romani 1969.11.30 発効）による。

西方典礼ミサへの「主の祈り」の導入が西暦四世紀末であったことは、多くの資料が証明している。(注)－3）“Sancti Ambrosii Liber de Mysteriis et Sermones de Sacramentis”に収められている“De Sacramentis”(注)－4）もその一つである。彼は第一～三の講和で洗礼のSacramentum（秘跡）について講じ、第四の講和から聖なる祭壇のSacramentum（秘跡）・ミサについて語る。アンブロシウスが秘跡について語るとき、旧・新約聖書を基にして「救いの歴史」を開示する方法を採った。ミサについて語る場合も旧約時代の聖なる祭壇の儀式から始める。例えば、Sacramentum（秘跡）のことばによる聖別によってパンとぶどう酒がキリストのからだと血に変わること（聖変化）を説明する際には「義の王・平和

の王」メルキゼデクの祭司職に言及し、これに優る「義の王・平和の王」キリストの捧げへと聴衆を導いて行く。第五の講和－四では、前節までの聖なるパンとぶどう酒の講和に続いて「主の祈り」について語る。「…あなたを洗礼によってお生みになった御父、御子によってあなたをあがなわれた御父（の方）へ、…『われらの父よ』と言いなさい。…『聖とされますように』とは…かれ（御父）の聖性がわれわれのもとにくることができるために、かれがわれわれのうちに聖とされるように、と願うことである。…『われらの毎日のパンを今日われらに与えたまえ』…イエズスはパンと言われた。しかし、エピウーズィオン（ἐπιούσιον）すなわち『実体的な』と言われた。そのパンは…われわれの魂の実体をささえる永遠の生命のパンである。それでギリシャ語でエピウーズィオス（ἐπιούσιος）と言われる。一方、ラテン訳は、…『毎日のパン』と訳している。ギリシャ語で『今日』は『エピウーザ・ヘーメラ』（ἐπιοῦσα ἡμέρα）と言われているからである。…ギリシャ訳は、この二つの意味を、一つの言葉で言い表したが、ラテン訳は、『毎日の』と言う。」（De Sacra.”訳文一一六～一一九頁）これは明らかに「主の祈り」と聖体及びその拝領との関係を前提にした講和である。なお、エピウーズィオス（ἐπιούσιος）については当該箇所注118「…大部分の教父たちは、この願いを、聖体についての願いであると解釈している。この解釈に従って、どの教会（ミラノ―アンブロシウス、アフリカ―アウグスティヌス、ローマ―ヒエロニムス等の文献参照）でも、『主禱文』が、聖体拝領の準備のためのもっともよい祈りであると考えられていた。」をも含めて参照されたい。現代の典礼神学者 J. A. Jungmann は「聖体拝領の儀は、…聖体拝領そのものを取り扱っているとともに、…その遠い準備にも触れています。聖体拝領の準備としては、何よりも主の祈り（Pater noster）があげられます。これは、まず第一に日用のかてを求めるからであり、また次に罪のゆるしを願うためでもあります。われらの罪をゆるし、またすべての悪より救いたまえという願いは、その後文『主よ、過去、現在、未来の　すべての悪より、われらを救いたまえ（Libera nos, quaesumus…）』の祈りの中に続けられ、その祈りは『われらの主イエズス・

キリストによりて（Per Dominum nostrum）』で結ばれています。こうしてわたしたちは『天にまします』の祈りを主の御口づから受け、ほかの祈りと同様に、主を通して、天の父にささげるのです。」（注－5）これら二資料は、各の観点から、ミサ典礼における「主の祈り」の位置づけとその意義・役割を紹介している。

二、Canonの「主の祈り」副文に続く“doxologia”について

ローマ・ミサ典礼文の「主の祈り」に続く副文～「われらを試みに…、われらを悪より…」の延長としての挿入祈願（embolismus）～の後に“doxologia”が挿入されたのは一九六九年のことである。（注－6）ローマ・ミサ典礼文には古くから奉献文の結びとしての栄唱“doxologia finalis”が「主の祈り」への招きのことばの直前に入っていた。（注－1参照）それ故、新たな“doxologia”の挿入がミサ典礼文に必要不可欠なこととは言い難い。この句の挿入は、改訳「主の祈り」作成を見据えたエキュメニカルな判断によるものと思われる。

ところで、一九九九年二月二十八日付カトリック新聞は、拙稿の完成を前に、臨時司教総会において聖公会・カトリック共通訳「主の祈り」試用を承認した旨、報道した。（注－7）これにより口語体共通訳「主の祈り」誕生は確実になった。ここに、聖公会・カトリック共通訳『主の祈り』案（『主の祈り』共通訳検討ワーキング・グループ）の全文を転載する。

「天（てん）におられるわたしたちの父（ちち）よ　み名（な）が聖（せい）とされますように。み国（くに）が来（き）ますように。みこころが天（てん）に行（おこな）われるとおり地（ち）にも行（おこな）われますように。わたしたちの日（ひ）ごとの糧（かて）を今日（きょう）もお与（あた）えください。わたしたちの罪（つみ）をおゆるしください。わたしたちも人（ひと）をゆるします。わたしたちを誘惑（ゆうわく）におちいらせず、悪（あく）からお救（すく）いください。国（くに）と力（ちから）と栄光（えいこう）は、永遠（えいえん）にあなたのものです。アーメン」（注－8）

三、「主の祈り」翻訳の歩み
～日本ローマ・カトリック教会の場合～
（前回発表時の諸資料を参照されたい）

上記共通訳試用が承認された以上、改訳規範版『ミサ典礼書』（紀元二千年完成予定）にも、この「主の祈り」（案）を基にして検討され、その後最終的に採択されることであろう。

【注】

㊟－1　同総則（No.55）参照。感謝の祈り・奉献文（Canon）は八つの構成要素からなる。その八番目「結びの栄唱」“Per ipsum,et cum ipso,et in ipso,est tibi Deo Patri omnipotenti,in unitate Spiritu Sancti,omnis honor et gloria per omnia sæcula sæculorum. Amen”は“doxologia finalis”と称され、奉献文（Canon）の最後に神の栄光への賛美を表す為の会衆による応唱である。我々はこの“doxologia”によって奉献文が「～結ばれる」ことに留意しておく必要がある。なお、感謝の祈り・奉献文（Canon Missae）は聖変化を含むミサの主要部でり、第二ヴァティカン公会議まではこの中の四番目「制定の叙述」（キリストのことばと行いによる最後の晩餐の再現、受難と復活の秘跡の制定、聖体の秘跡の制定とその神秘の永続命令）が特に強調されていた。

㊟－2　同総則（No.56）参照。交わりの儀（Ritus Communionis）は（C）感謝の典礼の第Ⅲ部にあたり、十一の構成要素からなっている。「主の祈り」はその最初に位置する。

㊟－3　J. G. Ripplinger 著『聖体祭儀の史的展開』（南窓社一九七〇）三三六～三三七頁と当該注4～18参照。
※本書は Canon の「主の祈り」後文に続く doxologia の挿入時期（一九六九年）に言及している。

㊟－4　アンブロジウス著／熊谷訳『秘跡』昭和三十八年創文社版参照。

㊟－5　J. A. Jungmann, S. J. “DAS EUCHARISTISCHE HOCHGEBET-Grundgedanken des Canon Missae-” Würzburg 1954／『聖体祭儀――ミサ典文の中心思想

――』（南窓社一九六八）八九～九〇頁参照。

※一九五四年に出版（一九六八年訳）された本書がCanonの「主の祈り」後文に続くdoxologiaの挿入に言及していないのは当然である。（注－3参照）

注－6　現在の規範版『ローマ・ミサ典礼書』（一九六九／邦訳認可一九七八）では「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの」である。"Quia tuum est regnum, et potestas, et gloria in sæcula."

注－7　カトリック典礼委員会『主の祈り』共通訳検討ワーキング・グループ代表金子知代氏によると、カトリック側の今後の予定は、5月中…試用期間、6月…司教協議会で決定、10月…聖公会・カトリック共通訳「主の祈り」最終検討、12月24日…共通使用の実現　となっている。

注－8　共通訳のdoxologiaについてのカトリック側の見解は次の通りである：

「ミサの式次第の中に、主の祈りの後の副文の応唱としてとり入れられるが、通常は主の祈りには含まれない。エキュメニカルな集会の際にはともに唱えることになるので、本文と合わせて案を作成した。」（原文のまま）

注　市瀬英昭著「主の祈り」口語訳によせて（南山大学　紀要　第26号　平成10年12月）には、時代的には、筆者が前回配布した諸資料に続く貴重な資料が掲載されている。

【配布資料名紹介】

（資料1）Titus Ziegler OFM 譯『彌撒典書』一九三五（昭和一〇）年第1版／一九四九（昭和二四）年

（資料2）Federico Barbaro SS/SDE 訳編『毎日のミサ典書』一九五五（昭和三〇）年初版／一九六二（昭和三七）年

（資料3）ORDO MISSÆ CUM POPULO　「キリストと我等のミサ」

（資料4）廣瀬源八編纂『彌撒拝聴幼の導き』一八八六（明治一九）年

（資料5）Emile Raguet MEP 編纂『公教會羅甸歌集』一九〇三（明治三六）年

（資料6）小嶋準治譯『舊新両約聖書傳　新約　全　新約書傳』一八八〇（明治一三）年／一八八三（明

治一六）年再版

（資料7）Jean-Mrie Marin MEP 著述『耶穌言行紀畧』一八八〇（明治一三）年

（資料8）高橋五郎　譯『聖福音書　上』一八九五（明治二八）年

（資料9）Emile Raguet MEP 譯『我主イエズス　キリストの新約聖書』一九一〇（明治四三）年

（資料10）北英國聖書會社『新約全書』一八八二（明治一五）年

（資料11）英美宣教師　著『聖公會禱文』一八八三（明治一六）年